

展示・収蔵品より

美を知る

361

漆器は活や織に供れる工芸品であり、同時に地域歴史や暮らしの記憶を映す存在でもある。秋田も古来、独自の技法と意匠が育れ、漆器は生活文化の中で多様な形を取ってきた。本県は県庁所在地の秋田は縄文時代にまでさかのぼる。秋田市の戸川遺跡から出土した漆塗りの土器や藍胎漆器(写真1)は、縄文が漆の防水性を光沢の美しさや耐熱し、実用品と美術的価値を見だしたという功績語っている。漆は補綴材としてだけでなく、装飾を備えた素材としても、既に高い価値を持っていたと考え

られる。

時代が下り、湯沢市連町では、武具装束を彩る漆塗りのたばこ煙草として発展したと知られている。秋田藩士の殖産政策策や石川藩人の支援を受け、職人たちは伏見・神楽、木地加など多様な技法を積極的に導入し、川連漆器は技術の集積地としての地位を確立し、1976(昭和51)年に国の伝統的工芸品に指定された。現在も職人たちが伝統を継ぎながら、新たな表現に挑んでいる(写真2)。

17世紀後半には、能代で書懸(写真3)が始まる。ビュッス古の根付生か、漆塗の幾重にも塗り重ねた生地の透かしが、武家の美意識にかなった。なか

秋田には来富の通達や調度品として、しばしば民衆の書懸を購入している。明治には万国博覧会の出品や輸出品として、猫足・熊足の足風の器も取り入れられた。伝統を守りつつ、時代の要請に応じた変化をかけた能代書懸は、秋田の土の中でも早くから国際的評価を得た存在である。

一方、角鉾は町人文化の中で春慶・夏慶・秋慶・冬慶の4つに分かれ、町人・平衆へよく愛用されてきた。戦後に生まれた生駒塗(写真5)は、



写真5 生駒親雄作「生駒塗 流水文平鉢」
昭和初期 県立博物館蔵

つて始められた技法は、当初「長八塗」と呼ばれ、実用品を重視した実用品として普及した。言葉には「角鉾塗」として各地方に広がり、町人の暮らしに定着した。漆器として扱われた、明治以降は漆器でも、地域の個性として今なお愛用されている。



写真6 加納大郎作
秋田塗 花文六角鉢
昭和初期 県立博物館蔵

特別展示「秋田の漆器—多様な技とその歩み—」

独自技術と意匠育む



写真1 「藍胎漆器」 秋田市戸平川遺跡出土
縄文時代晩期 県埋蔵文化財センター蔵



写真3 山打三九郎作「能代春慶 硯箱」
江戸期 県立博物館蔵

【又々】 県立図書館と県立博物館による特別展示「秋田の漆器—多様な技とその歩み—」は、秋田市山王の県立図書館2階特別展示室で5月19日まで。能代春慶、川連漆器、紫塗など県内各地に伝わる漆器の技法や意匠を紹介する。開場時間は午前9時半～午後5時。入場無料。水曜休館(祝日の場合は翌平日)。問い合わせは県立図書館 ☎018-866-8400

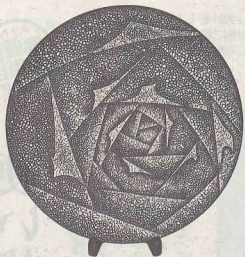


写真2 加藤吉衛作「川連漆器」
昭和初期 県立博物館蔵
白い花



写真4 高橋春慶 木具座
明治期 県立博物館蔵



写真5 倉田雄作「紫塗 墨色座」
大正期 県立博物館蔵